特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議　建造物部会（第 36 回）

議事録

日　時　令和 7 年 1 月 31 日（金）13:30～

場　所　西之丸会議室

出席者　構成員

小濵　芳朗	名古屋市立大学名誉教授	座長
溝口　正人	名古屋市立大学大学院教授	副座長
小松　義典	名古屋工業大学大学院准教授	
野々垣　篤	愛知工業大学准教授	
麓　　和善	名古屋工業大学名誉教授	

オブザーバー

井川　博文	文化庁文化資源活用課文化財調査官	（リモート）

事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護課

議　事　(1) 重要文化財建造物等保存活用計画について（環境保全計画）
(2) 表二の門雁木復元検討について

配布資料　特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 建造物部会（第 36 回）資料

事務局	1　開会 2　あいさつ 本日は、ご多用の中、第 36 回特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議建造物部会にご出席いただき、誠にありがとうございます。本日議題といたしますのは、重要文化財建造物等保存活用計画についてほか、2 件です。議題 (1) では重要文化財建造物等保存活用計画について (環境保全計画)、議題 (2) では表二の門雁木復元検討についてです。この 2 件について、先生方のご意見をお伺いしたいと考えています。限られた時間ではありますが、皆様から貴重なご意見をいただきながら進めていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。 3　構成員、オブザーバー、事務局の紹介 4　今回の議事内容 資料の確認をします。表面に会議次第、裏面に出席者名簿となっています。2 枚目が座席表です。A4 でかなり分厚くなっていますが、資料 1 となっています。A3 で資料 2 があります。あと机上に、追加資料として、写真を配布しています。 それでは、議事に移りたいと思いますので、ここからの進行は座長に一任します。小濵座長、よろしくお願いします。
	5　議事 (1) 重要文化財建造物等保存活用計画について (環境保全計画)
小濵座長	資料について事務局から説明していただいたあと、構成員の先生方からご意見を伺いたいと思います。よろしくお願いします。 まず、議事 (1) 重要文化財建造物等保存活用計画について、環境保全計画について、事務局より説明をお願いします。
事務局	今回、前回 9 月の建造物部会でご指摘された点を修正した第 1 章と第 2 章に加え、第 3 章の環境保全計画を新たに取り扱う内容となっています。初めに第 1 章と第 2 章の修正箇所をご説明し、一度切らせていただいたあとに、第 3 章の説明に入りたいと考えています。よろしくお願いします。 第 1 章と第 2 章の修正箇所は非常に多くありますが、主な修正箇所を資料の 1 ページ目に整理しています。まず、大きな点としては、計画の中で取り扱う建造物に、重要文化財建造物とともに乃木倉庫を入れていましたが、本編の計画の中では扱わず、付編のほうでまとめて記載することにしました。本編の中では乃木倉庫を扱いませんが、乃木倉庫についても保存活用の方針を検討していきたいと考えています。今回お配りした資料の

	中で、121 ページ以降が付編となっており、内容自体は変わっていません。 次に、重要文化財指定の官報告示について、前回スキャンデータをそのまま掲載していましたが、資料 18 ページのように文字起こしをし、改めて整理しています。 続く、資料 21 ページからは文化財の価値を、前回いただいたご指摘をもとに再検討しています。ご意見をいただいた中で、価値の整理の仕方が重要文化財の指定基準としてある要素を、例えば意匠的価値、技術的価値など、そういった側面から整理したほうがいいのではないかというご意見がありました。そのようにしています。 その他の細かい点として、資料 22 ページに新たに比較図を掲載しました。前回はここに類例の修正表を載せていましたが、本編ではなく資料編で載せる方針としました。 資料 35 ページから始まる計画の概要・目的の箇所についても、さまざまなご意見がありました。改めて計画の目的について押さえ直すと、本計画では現在進めている隅櫓の耐震診断の結果をふまえて、今後の防災対策や保存修理について具体的に検討していきます。今後の方針というのを、防災や保存修理を計画していくことに重点をおいていきたいと考えています。そのため、現状変更申請をできるだけ省略することは、ほとんど想定しておらず、それよりも今後の耐震診断、耐震補強の修理に向けて、現状の文化財のどこに価値があるのか、どこを保存していくべきなのか、を整理したいと思います。 第 1 章は、そのほか多くの点を修正しています。修正箇所を青字でお示ししていますが、今回説明は省略いたします。 続いて第 2 章です。資料の 49 ページの部位の区分についてです。表の 2 - 4 の記載が、資料の 48 ページの表 2 - 3 の記載と齟齬が生じてしまっていたので、表 2 - 3 の記載に合わせて表 2 - 4 の記載を修正しました。また基準 4 について、実際にあてはまる設備、具体的な部位、防災設備、電気照明設備の事例を修正しています。具体的には見え隠れとして隅櫓と表二の門に木箱が設置されています。木箱の中に設置してある報知器等を基準 4 に追加しています。表にも追記しており、例えば、資料 57 ページの西南隅櫓では木箱の報知器を基準 4 にして、ほかの隅櫓にも同様に追加しています。以上が第 2 章の修正箇所です。 こちらでいったん切らせていただいて、第 1 章、第 2 章についてご意見をお願いします。
小濵座長	第 1 章、第 2 章の修正箇所についてご説明がありました。何か、ご意見はありませんか。
麓構成員	簡単なことから、まず。14 ページから 18 ページにかけて、創立沿革について書いてあります。これはいろいろ参考文献を見て書かれている。ではないですか。
事務局	そうです。
麓委員	では、2 の最後に参考文献を書いておいたほうがいいかと思いました。
事務局	はい。修正します。

麓委員	今度は、部位、部分のところです。49 ページで、基準 2 に犬走・側溝モルタル仕上げが入っています。49 ページの表 2 - 4 の部位の区分について。これは、50 ページでは、ピンク色の基準 3 になっているのではないでしょうか。
事務局	確かに、そうです。
麓委員	これは、どちらに統一しますか。基準 2 にするのか、基準 3 にするのか。
事務局	どちらかというと、基準 3 のほうです。
麓構成員	東南隅櫓の北面と西面の壁のモルタル塗とも関係してくるんですけども、それは確か、基準 3 の色分けになっていたと思います。64 ページは多分、将来の根本修理なり、壁の塗り替えまで行う修理では、おそらくモルタル塗を剥がして、本来の土壁の上に漆喰塗に戻すことになると思います。そうするとこれは、先ほどの基準の、主たる形状および色彩を保存する部位なのか。材料の形状・材質・仕上げ・色彩の保存を行う部位と書いてあって、材質はモルタルから漆喰、あるいは漆喰塗に変わると思いますけど。そのときには。この段階では、やはり基準 3 にしておいたほうがいいんですかね。
事務局	基準 3 のところ、維持更新の際に、復元的整備が必要な部材、部位としているので、この取り扱いのほうがふさわしいのかと思います。
麓構成員	そうすると、犬走・側溝モルタル仕上げを、基準 3 に移せばいいですか。
事務局	はい。
麓構成員	それがちょっと気になりました。ちょっと気になったのは、今お話ししたところです。
小濵座長	今の、素人でよくわからないですけど。犬走・側溝モルタル仕上げが基準 3 になると、犬走は、材質は保存しないということですか。そういうことですか。
麓構成員	はい。
小濵座長	形状、色彩だけが前に倣うけども、材質は、
麓構成員	復元する可能性があるという意味です。材質を保存するということになると、この先ずっとモルタルのままでいかないといけないかなという話です。タタキになるかもしれない。特に、この部分は、多門櫓を復元すると、変わってくるわけです。
小濵座長	モルタルを元の材質に戻したと。その後はどうなるのですか。基準 2 に

	なるのですか。
麓構成員	基準2でしょうね。
小濵座長	基準2に変更するのですか。
麓構成員	そうですね。それは、保存活用計画、10年ごとに見直すことになっていますから。
小濵座長	今の東南隅櫓の壁の下の部分は、現状では基準3に該当するということですか。
事務局	はい。修理をしたら、基準2です。
小濵座長	そのほか、ありますか。
野々垣構成員	基準がいくつという話で、例えば69ページ、東南隅櫓の内部の2階の図にパッケージ型消火設備が基準だけしかなくて、数字が抜けています。それが何か所かあるので、もう一度確認して漏れがないようにしてもらったほうがいいかなと思ったのが一つです。 それと、21ページです。全面的に書き直された部分だと思います。建物ごとにまとめられているので、建物ごとの書き方です。21ページで、西南、東南、西北隅櫓について書いてあります。(1)(2)(3)の区分が、なんとなく無理に分けているところがあるのではないか、と感じるところがあります。例えば、(1)意匠的価値というところにも、構造的な話が書いてあって、技術的価値の内容と重なるところがあったり。(3)歴史的価値は、本当に単純に考えて、文化財的価値というのをまとめみたいな話で書いてあると理解したほうがいいのかもしれないですけど。歴史的価値という項目ではなくて、全体的な文化財としての価値というのが、3番目に書かれるという話になっています。6のタイトルとの重なりもちょっとあるので、(1)(2)(3)を明確に分けるのか。分けずに段落で切って書いていくとか、そういうふうにしてもいいのではないか、というのが気になりました。 6の大きなタイトルと、さっきお話した文化財的価値が書かれているであろう(3)との関係を、少し整理し直してもらうといいのではないかと思いました。
小濵座長	今のご意見は、どうですか。
麓構成員	先ほど、この会議のメンバーを紹介したときに、委員とオブザーバーと、市の教育委員会と、名古屋城のメンバーの紹介だけでしたけど。この業務を委託しているところがあります。こういうところの多くは、委託したところが書いているわけでしょう。そうすると、委託者も、せっかく今日も来られているので、きちんと紹介して、今のような発言に対する、質問に対する意見というのは、実際にこのへんをまとめられた受託者が回答できるチャンスを設けたほうがいいと思います。会議の進め方として。

事務局	今日、計画協会さんが同席されているので、発言があれば、積極的にお願いしたいと思います。名古屋市の事務局だけではなく、発言がありましたらお願いします。
麓構成員	事務局サイドとしていらっしゃるわけですから。 特に今の質問の、21 ページの意匠的価値、技術的価値、歴史的価値と、あえて分けて解説されているのは、意図があると思います。もしよろしければ、そのへんをいったほうがいいのかなと思いました。
小濵座長	野々垣先生がいわれたのは、明確に分かれているのではなくて、重複しているところもあるのではないか、というお話ですか。
野々垣構成員	重複しているところはあって、それがきれいに分けられないと思っています。無理やり項目を分ける必要性があるのかどうかという。もっと明確に意匠というのは、本当に表面的なデザインの話で、構造や技術をまとめて整理するとか。そういった整理の仕方のほうが、明解な感じがしました。歴史的価値というところは、歴史というのは、建物の歴史を書く、書かれている内容は文化財的価値をまとめみたいなかたちで書いてあると思ったので。歴史的価値というのは、もう少し広がった話になってしまうので。まとめだったら、まとめ的なタイトルのほうが、よりわかりやすいのではないかと感じました。
小濵座長	歴史的価値はちょっと。意匠的価値と技術的価値は、ある程度明確に分かれていて、歴史的価値は、はっきりしていないですね。
事務局	ここの整理の仕方は、前回いただいたご意見で、重文の評価基準を参考にしたら、というところで、こういう分類にしました。確かに歴史的価値というと、今の計画の中だと改めてここに取り上げるということになってしまっているのかと思います。
事務局	重文の価値基準の書き方というのはあって、それと対応できることでわかりやすくなるようにしました。価値の書き方は、重文に合わせていくつかに分けて、それに対応している書き方でも別にかまわないのかなと思います。重文の価値基準として、あまりわかりにくくなるのもいやだな、というところです。これは、どちらのほうがわかりやすいのか。おさまりが、いいのかということだと思います。もう一度、市の担当者と調整をしていきます。
麓構成員	重要文化財の指定のときの価値基準が 5 つあります。意匠的に優れたもの。技術的に優れたもの。歴史的価値の高いもの。学術的価値の高いもの。最後が地域性と流派です。そのうちの上の 3 つに従って述べようとした、ということですよね。 名古屋城の隅櫓の特色として、西南隅櫓と東南隅櫓は同時期にできて、同じような意匠や技術があります。西北隅櫓については、少し時代があとで、様式的にも技術的にも違う。それを、ちゃんとここで明確にいいたかった、ということだと思います。

事務局	西北隅櫓のほうが、時代があとで、例えば構造形式についてはそれでいいんですけど。構造部材が古くて材料が違うんですね。そのへんをどう表現していくのか。西北隅櫓のところは、構造は新しいけど、部材は古い。これは非常に特色があることだと思っています。それがなぜかは、決着していません。
野々垣構成員	適切に判断していただければいいと思います。さっきいわれた5つの項目に合わせるようにしたということは、別にかまわない、かまわないというか、読んでいて違和感がなければいいかなと思っています。
小濵座長	そこらへんを、もう少し考えてもらうということでいいですか。今のご意見を伺って。
事務局	検討します。
溝口副座長	最近の指定の傾向からいえば、重文として建物で、一つひとつの建物の特徴が、5つのどれかということと。それが大坂の陣の前に、家康が督促状をだして材木を集めたりしている中で整備されて。西北隅櫓みたいな、城の体裁をどれだけ得ようというのか。それは彦根城など、ほかにもいくらでもあると思います。そういのが当時の状況と合わせて、重文として残っているということ、名古屋城の価値づけとしては重要だと思います。 5つあるから、5つ全部満たしていないといけないわけでもなくて、どれか1つ、あるいは2つ、重文に至る場合は複数、5つのうちどれがいいか、どうするのか挙げればいいわけですけども。そのへんはほかの指定の文章を参照しながら書かれればよくて。箇条書きでこういうふうに、(1)(2)で項目立てするかどうかは、そこがそういうふうに分けてしまうと逆に書きにくいところがあるのかもしれないです。意匠の部分では、こうこう、こういうふうな特徴があってという書きぶりはいいと思います。そのへんは工夫していただければいいと思います。
事務局	5つのうち、2つはあてはまらないので。そのほかはなるべく書くようにしました。書く内容が濃い薄いはあると思いますけども、3つは価値を丁寧に書いていくという判断をしました。文化財的価値がどうかは、(1)(2)(3)はかなり文化財的価値が高いと思っていますので、(3)はちょっと薄いですけど、ニュアンスとしてはでてこざるを得ない。一度、精査します。
小濵座長	この図1-8を見て、私は構造が専門だから、わかりやすいなと思ったんですけどね。
溝口副座長	いいと思いますよ、それは。平面のうえでは。
小濵座長	そこらへんを上手く書いてもらえればいいと思います。
溝口副座長	構造的な平面のうえではいいと思います。
事務局	書き方や構成は、もう一度検討し、確認させていただきたいと思います。

小濵座長	ほかは、よろしいですか。
溝口副座長	21 ページの、少し細かい話ですけども。あとの乃木倉庫のところでもそうなんですけど。すごい、すごい、ということよりも、冷静に類例と見たときに、こういう特徴があるという評価づけの記述を協議してもらいたいと思っています。意匠的価値の、後ろから 2 行目の、格子や狭間といった闘争的な要素を出さない、というのもいわんとするところはわかりますが。
事務局	このあと修正いたしますが、今回は間に合わなかったです。
溝口副座長	そういうような、いくつか表現の整理をして、項目立ての件も含めて。とってもクリアに 5 つに分けて、これはここの特徴でというよりも、いろんな要素や特徴を含んだものが、そこにあるわけなので。そこは、工夫をした書き方をしてもらえればいいと思います。冷静にどう価値づけるのかという書きぶりにしたほうが、乃木倉庫のところでも、前回の話でもいいましたが。そういう書きぶりを心がけてもらったほうがいいかなと思いました。 先ほど麓先生がいわれたご意見で、部分、部位のモルタルのところや外構のところは、例えば、64 ページ、65 ページの隅櫓のところで、65 ページの外壁のところの、基準 3 でモルタル下地となっているところに、これはモルタルになったのはいつでしたか。
事務局	本丸御殿の修理のあとなので、平成です。
麓構成員	東南隅櫓ですか。
溝口副座長	東南隅櫓はもっと前ではないですか。もっと前、20 何年かの修理ですよね。
事務局	そのあとに部分修理をしていて、そのときです。
溝口副座長	そのときにモルタルですか。
麓構成員	そんなことがよく許されましたね。そんな乱暴な修理をしたんですか。
溝口副座長	報告書に、
麓構成員	報告書はでていないです。小修理ですから。
溝口副座長	20 何年だったか、報告書がでていますよね。
麓構成員	あれは西南隅櫓ですよ。
溝口副座長	東南隅櫓はでていなかったですか。

麓構成員	古いほうはね。古いほうはでています。
溝口副座長	古いほうです。西南はこの間のですか。
麓構成員	今、平成という話でしょう。平成に修理したと。
溝口副座長	いやいや、それはモルタルで修理はできないです。
麓尾構成員	そんな乱暴なことをしますか。
溝口副座長	やったかもしれないです。
麓構成員	やったかもしれない。それは、名古屋市は許せないのではないですか。そんなことをやるというのは
溝口副座長	名古屋城博か何かのときも、何もやらずに、コンクリートを下に造ったりしているから。結構あるかもしれない。
麓構成員	それは届出をだすわけでしょう。
事務局	出しています。
溝口副座長	それは、確認してもらうとして。お伝えしたかったのは、基準3になっていると、えっ？って思うんですよね。65ページの備考のところで、いついつの修理に改変を受けているもの、とか書いておくと、これはそれだから、また基準2にすればいい、ということがこれを見てわかります。そういう工夫を、修理の来歴などもまとめられていますよね。そういう情報もなるべく落とし込む。例えば、基準3になっているものも、基準1か2でいくはずのものに3が入ってきているというのは、犬走のところもそうです。何らかの当初からの改変が入っているところです。そういうことを備考のところに書いて、できれば、この表を見たときに、あそこはどうなっていたっけ、というのを見たときに、はいはい、ってわかる表にしてもらうのが、保存活用計画の報告書として大事です。 これはわからないから、基準3はどこだろうって全部読み直していかないと、実際の指示の計画が立てられないというものではなくて。そのための表ですから。そこに書き込んでおいてもらうというのを、ほかのところも含めて鋭意心掛けられると、このあと使うときにとっても使いやすいです。
小濵座長	改変のあったところは、きちんと書いておいたほうがいいですか。
溝口副座長	普通は付く。どうなんですか、犬走と同じなんですかっていう、多分、我々がそこにすぐ目がいってしまうのは、いつ頃こうなって、ピンク色になっているんだっけ、ということになるわけです。そうすると、一覧表のところにそこの経緯がパッと欄外でわかっていれば、ああそうか、だからこうなのねって。当然は当然なんですけど。

小濵座長	モルタルのところは、みんな基準3になっていますね。
溝口副座長	それはいいですけど。修理の来歴を整理するというのは、それが一覧表の部分、部位のところの現状がどういうふうになっているのかということとリンクしてくることになるので、そういう整理の仕方をされるといいです。そのためにあるというか。
麓構成員	どっかに修理履歴を書いたのがありましたよね。
溝口副座長	ありました。
事務局	30ページです。
事務局	壁は補修用ではなくてやっているようです。
溝口副座長	壁のモルタルがいつだったかどうかというのは、整理してもらえればいい話です。それで何やっているんだ、という糾弾の場ではないですから。 これを今後、ちゃんと実践で使う場合に、一覧表を見て、これは基準3か、4か、2か、1かを今後見て、それで修理の計画を立てることに関しては、現状変更を一々かけるのではなくて、ここの中で謳われていることだからそこの範囲でやりますっていうためのものです。備考と書いてあるのは、そういうことだと思います。ほかのところでは書き込んだことがあるんですけど。そういうふうに心掛けてもらえればいい、という話です。
事務局	第2章の写真や図、表のところで工事の来歴などがわかるように、対応できるようにします。
溝口副座長	対象のところや、西南の工事のところは書いてあったりします。同じように、少なくとも基準3になっているところは、なんらかのそういう言及がないと。本来、基準3になっているところは、何か特別な理由があると思います。
事務局	そのようにします。
事務局	参考までにお伝えすると、30 ページの修理履歴の中の東南隅櫓で、平成24年の外壁部分補修工事がモルタル使用と書いてあります。
小濵座長	ここでモルタルに変わったんですね。
事務局	はい。
麓構成員	それは本来いけないことです。そういうことがないように、今回の保存活用計画をちゃんと作って、部位、部分に分けて、今後はこのとおりに行ってくださいね、という話です。今、驚くべき事実が発覚しましたけど。
溝口副座長	国ではないですけど、県くらいでは、ほかのところでそういうことありましたから。やはり、そういうことがないように、ということなんですよ

	ね。本来なら現状変更で、工事をやるときにはこういうふうに直します、と書いて。一々煩雑なところがいるけれども、きちんとどういう根拠に基づいているんですか、ということがここに全部入っている。さっきもお話しましたけど、30 ページの修理履歴を見て、その台帳を見て、どこかどうだったかということではなくて。それを今回まとめて各部分、部位のところで整理し、備考にちゃんとそのへんが書かれて、見ればわかるという一覧にまとめていくということだと思います。
小濵座長	修理のためにですね。ほかに、よろしいですか。 それでは第 3 章の説明をお願いします。
事務局	第 3 章の環境保全計画です。重要文化財を取り巻く周辺環境の保全について課題整理と対策を扱うものです。今回、先に周辺環境を取り扱ってしまっていることで、順序が逆転してしまい、大変恐縮です。資料の 2 ページ目に、章構成を挙げています。ご覧いただくと、第 2 章の第 3 節で重文の建物そのものの環境保全、管理をどうしていくのかを取り上げることを予定しています。それより先にまわりをということで、あらかじめご了承をお願いします。 実際に環境保全計画は、資料の 98 ページから始まっています。まずは、周辺環境として、樹木、石垣、雨水排水設備、保護柵の 4 つの項目から課題を整理しています。それぞれ簡単にご説明します。 まず樹木です。資料 99 ページの写真をご覧ください。隅櫓の近くに樹木が多くあり、落ち葉の堆積や枝の落下が原因と考えられる破損も確認しています。こういった課題が見られますが、この対策についてはすでに史跡の維持管理のほうで名古屋城植栽管理計画を策定しています。基本的には、この方針の中で文化財に影響を及ぼす樹木が、課題対策されています。その方針に従いながら、日常管理で対応できる部分は対応していきたいと考えています。 次に石垣についてです。来年度に東南隅櫓、西北隅櫓の石垣の耐震診断を予定しています。そちらの結果次第で、少し書きぶりが変わってくる可能性もあります。そのほかですと、二之丸大手二之門、資料 102 ページの写真を載せていますが、こちらで大きな変状を確認しています。実際に、その建造物に対する石垣というのも課題を確認していますが、こちらも史跡のほうで別途、特別史跡名古屋城跡内の石垣の保存方針の策定を進めており、具体的な対策はこの中で検討されていく見込みとしています。 雨水排水設備は、樹木と同じく落ち葉の堆積が課題としてあります。 続く保護柵に関しては、資料 104 ページの写真をご覧ください。城内の水堀沿いに設置している水色の鉄柵や、二之丸大手二之門のガードレールを課題として取り上げています。これらの保護柵に関しては、早急な対策が難しいと考えていますが、改修や更新の際に文化財建造物と調和した、配慮した仕様にする必要があると考えています。 これに続く 104 ページの 5. 文化財建造物と一帯となって価値を形成する物件に関しては、前回の資料では第 1 章に入れていましたが、ご意見をいただき第 3 章に移動しました。 資料 107 ページからは、環境保全の基本方針と区域区分をお示ししています。この区分については、計画区域全体をエリア分けし、城内のすべての建造物を段階的に保全していくためのものです。図 3 - 6 で区域を色分けしています。分類に関しては、保存、保全、整備の 3 つとしています。

	この3つのエリアごとに保全方針を検討しており、資料108ページの(2)各区域の保全方針に、この方針を記載しています。まず保存方針です。重要文化財建造物が所在している本丸、御深井丸、特に景観が重視される二之丸庭園を入れています。この保存区域では、原則として新たに建造物を設置しないこととし、例外として歴史的建造物の復元や防災上必要な設備、現状で設置されている建造物などに限って新設、改修を可能とする方針にしています。次の保全区域は、重要文化財建造物に面する区域として、景観に配慮したうえで公開活用に関する設備などを設置できる方針としています。3つ目の整備区域に関しては、ほかの2つの公開エリアを分類したものとは違い、非公開エリアのバックヤードを、こちらの整備区域に入れています。管理活用や防災対策上で新たな建造物が必要となった場合は、この整備区域の中で設置する方針としています。これらの区域区分によって、計画区域全体で重要文化財建造物の環境を保全しつつ、史跡整備をあわせて進めていきたいと考えています。 　次に第4節で、城内の建造物を建物ごとに分類しています。保存建造物、保全建造物、その他の建造物の3つに分けています。107ページの図3-6で、建物ごとに色分けをしています。その方針は109ページの(2)に記載しています。保存建造物は、重要文化財建造物に準ずるものとし、現存の建造物や復元の本丸御殿などを、こちらに分類しています。それについては、材料自体を保存して、現状の形式を保存することを原則として考えています。その一方で、保全建造物に関しては、城内の中でも景観に配慮された建造物や外観復元をした建造物として、西之丸城宝館や御深井丸の茶席などを、こちらに入れています。保護方針としては、保存建造物よりも緩くしており、保全建造物は位置や規模、形態、材料などを保全する方針としています。3つ目のその他の建造物は、非公開エリアの関係施設や、防災上の検知から支障が認められている建造物をこちらに入れています。これらは、将来的に残置するのか、撤去するのかの方針を定め、その際には歴史的景観を損なわないことを原則とし、位置、規模など方針を定めていくことを記載しています。 　110ページからは、分類した建造物ごとに基本情報を表にまとめています。表の中で、1つの建物の段の一番下に、破損概要を整理して記載しています。これに関しては、令和5年度に城内の建造物すべての破損調査を実施し、その成果を机上配布の資料で付けています。配布資料をご覧いただくと、破損の多くは経年劣化によるものだとわかります。その中でも、不明門、1ページ目の裏面をご覧いただくと、土塀の漆喰剥落がかなり目立つ状態になっています。御深井丸の茶席が、次のページですが、なかなか小修理が追いついていなくて、さまざまな箇所の劣化を確認しています。こういった破損調査をもとに、適切に修理しながら保存していきたいと考えています。 　本編の資料の117ページからは、防災および環境保全上の課題と対策を記載しています。こちらに関しては、117ページの図にもあるように、名古屋城の立地をハザードマップから示しているとともに、第3章のはじめに取り上げた環境保全の要素を改めて整理し、その対応をまとめて記載しています。 　121ページからは、付編の乃木倉庫の保存活用計画として、前回乃木倉庫を記載したものを、改めてまとめています。 　資料の説明は以上です。

小濵座長	ただ今の説明について、ご意見はありますか。
麓構成員	正確さを期すために、修正をしたほうがいいのではないかという話です。文化財（建造物）というのを、重文と捉えていますよね。重文を、重要文化財建造物。市指定文化財や登録文化財は、文化財建造物ではないという見方ですよね。この書きぶりはです。
事務局	書き方としては、そうなっています。
麓構成員	市指定文化財も、登録文化財も、文化財建造物なので。今回の保存活用計画が、重要文化財建造物を対象にしているので、文化財（建造物）といういい方ではなく、重要文化財建造物にして、重要文化財以外の保存建造物の中に、市指定文化財や登録文化財、復元された建造物などがあるというように、もう少し正確に表現したほうがいいかと思います。
事務局	修正します。
小濵座長	井川先生、よろしくお願いします。
井川オブザーバー	こちらを付編のほうにまわされたのは、前回私が発言したことがきっかけだと思います。 麓先生がいわれるように、この計画は最終的に認定計画に諮ることになります。重要文化財として認定計画に諮るうえで後ろにまわしてもらった次第です。だからといって、市指定のものやそれ以外のものが、文化財として認められないとか、そういうわけでは決してないです。 麓先生がいわれるとおり、こういうものがちゃんとあるということを、このあたりは書きぶりを若干工夫してもらって、おまけのようなかたちにはならないように、計画の中に組み込んでいただければと思います。
小濵座長	今、麓先生がいわれたように、重要文化財とその他の文化財を分けて書くということですか。
麓構成員	分けて書かなくてもいいです。ここに書いてあるのが重要文化財のつもりで、すべて重要をとって文化財（建造物）と書いてあります。それ以外というのを、保存建造物で扱っている中に市指定や登録文化財があります。それが、あまり適切な表現になっていないです。分類はこれでもいいです。文化財（建造物）というのを、重要文化財建造物にして、保存建造物に括弧して市指定文化財、登録文化財、復元建造物ほか、などの表現にしてもらえればいいかと思います。私が最初に、あらっと思ったのが 107 ページの図です。この色分けを見て、いわんとすることは青の重要文化財だけなんでしょうけど。余芳、乃木倉庫など市指定や登録文化財が、文化財とみなされていないのがおかしいと思っただけです。それが明確にわかるように、分類そのものはこのままでいいですけど、明確にわかるようにしてもらえればいいです。
小濵座長	麓先生がいわれたのは、109 ページの建造物の区分のところに関係してくることですか。

麓構成員	区分に問題があるといっているわけではないです。例えば、一番最初のところに、計画区域内に所在する文化財以外のすべての建造物の、この文化財は重要文化財を指しているので、重要文化財と書いていただければいいです。区分の話ではなくて、重要文化財を指しているところは重要文化財と書く。というのは、文化財保護法の中で、大きく文化財というのがあって、それを有形、無形に分けて、有形の中には指定文化財と、まだ指定にもなっていないような文化財があります。指定の中には、国指定があって、県指定があって、市指定があって、ということです。文化財の大きな概念としては、全部が含まれるので、ひっくるめて文化財です。109 ページ、このあたりに書いてある文化財を重要文化財とはっきり呼んだほうが誤解がない、間違いがないということです。
小濵座長	大元が、重要文化財の建造物保存計画ですからね。重要文化財と明確に示したほうがいいということですね。
事務局	（県指定・市指定などを）項目として備考に入れていけば、
麓構成員	分類はいいと思います。建造物の区分に問題があるとはいっていないです。
小濵座長	保存、保全、その他は、そのままでいいということですね。そこは改めてください。ほかは、よろしいですか。
野々垣構成員	第 3 章、98 ページのところです。第 1 節で、いきなり 1. 樹木という入り方が、ちょっと唐突すぎるというと変ですけど。保全すべき環境は何なのかというのを、書いておかないといけないのではないかと思ったのが一つです。 それが、107 ページ以降の保全は、区分は、配置図などいろいろを使って、どこが保全区域かを、対象は分かりますけど。そのあたりが、あとからでてくるかたちがいいのか。このへんでどっか伝えておいたほうがいいのではないか、というのが一つです。 基本的に、第 1 節というのは、保全すべき環境を阻害するものという意味ですか。課題になるものというふうに、タイトルが第 1 節 環境保全の現状と課題と書いてありますが、現状の課題として、樹木などがでてくるという、内容なのではないかと思いました。そのへんを少し気にされるといいのかな、というのが一つあります。 そういうことを考えると、2 の石垣という、100 ページです。石垣というのがちょっと、石垣だけでなく、樹木も、害するものだけではないような気がするんですけど。そこらへんの考え方が、どうなっているのかなと思いました。ないといけない木というものが、あるのかどうか、というのがわからないので。 樹木という一言であったり、石垣も基本は保存するものだけど、現状保全されていないところを書かれていると思いますけど。書き方だと思いますけど。そのあたりが、読んでいて気になりました。ご検討いただければと思います。

事務局	書きぶりとしては、確かに環境保全に障壁というか、影響をおよぼしているものだけを取り上げて扱っている内容になっています。今のご意見をふまえて、もう一度検討します。
野々垣構成員	そうすると、5の文化財と一体となって価値を形成する物件も、どこに置けばいいのかなということを、改めて思ってしまいます。そのへんも、ご検討いただければと思います。
小濵座長	1から5までが同列でみんな、箇条で書いてありますけど、構成がちょっと問題があるんですかね。
野々垣構成員	保全すべき環境を阻害するものという意味合いだと、ここから外れてくる、違う評価をしないといけないものが混ざってしまうというのがあります。そのへんを工夫されないといけないのかな、という感じは受けました。
麓構成員	基本的に、建造物の保存活用計画というのは、日本中で重要文化財の保存活用計画を作っていますが、それには、文化庁の指針となるようなマニュアル的なものがまずあって、それを見ながら作っています。その中で個々の重要文化財において、特殊な部分もあります。それは、少しずつ変えながら書いていけばいいと思います。基本的な表現などは、あえて変える必要はないと思います。だいたいどこの保存活用計画でも、現状と課題があります。まずは冷静に現状を分析したうえで、その中で何が課題になっているのか、というのをいっています。現状における課題だけを見出すわけではないです。課題ではないこともありますから。そういう意味合いでは、現状と課題というのは、このとおりでいいと思います。 ただ、そうはいいながらも項目が、樹木、石垣というのが唐突にでてくるのがいいのかどうかといのは、修正したほうがいいと思います。
事務局	第1節のあとに、そういった全体を補完する説明を入れて、細かなところに進んでいく構成で検討したいと思います。
小濵座長	構成の仕方をきちんと検討してください。ほかはどうですか。
溝口副座長	ほかのと違って、随分難しいなと思っています。特別史跡で、名勝もあって。これは重文の保存活用計画の中の環境保全、周辺の敷地をどう区分して、どういうふうに維持管理していきますか、ということだと思います。ちなみに、計画区域はどういう基準で、今回決まっていますか。史跡の範囲ではない。見ると、有料公開の区分、エリアと重なっているのかと思いますけど。史跡はもう少し広くて、名勝は東半分に四角くあるんですけど。
事務局	35 ページに計画区域図があります。基本的には名古屋城が管理している有料公開のエリアと、重文の二之丸大手二之門のある愛知県体育館の西側のエリアを計画区域として設定しています。
溝口副座長	これは主目的の文化財建造物のところに直接関係してくるので、計画区域は。あとのここで効いてくるんですけど、環境保全のところで。そもそもこのエリアでくくってあるのは、どうだったんでしたっけ。普通ですと、

	いろいろあって、住宅とかそういうものだと、建物があって庭園があって、その周辺などもあったりするんでしょうけど。あるいは駐車場を整備すると、隣地に。そこまでも計画区域に入れて駐車場の整備も含めますと。それは整備の区分になるような計画区域。それは場合によっては、もともとのお宅の敷地ではないところ、隣地まで含めて全体で、文化財の公開活用のために、施設を造るので、隣地までエリアを含めてやりますよ、など。そういう計画区域の決め方、それなりの方針があります。常に建造物を公開活用をしていくうえでの、どういう資するエリアか、ということでゾーン分けをするということだと思います。 35 ページのものは、どういうふうで区切ったと理解すべきでしょうか。
事務局	今行っている重文建造物保存活用計画とは別に、特別史跡の保存活用計画があります。史跡全体の保存活用というのは、そちらで扱っています。それとは別に、建物目線で重要文化財建造物に関連するエリアとして、この計画区域を有料区域内を中心に設定しています。
溝口副座長	それが、どこかに書いてありますか。 多分、公開活用の部分では、そこをまずきちんと書いて、有料で公開するエリアで重要文化財は基本的に、本丸御殿もそうですけど。例えば、今後耐震の補強ができれば、西北隅櫓や東南隅櫓も公開されていくようになっていくと思いますけど。そこの公開していくうえでは、107 ページに書いてありますけど、周辺の環境の健全性や観覧に至るルートに、変なものを建てたらだめなので、そういうものを保全していきます、という筋立てがあって、それで 107 ページの図 3 - 6 がくるというのが、文化財の保存活用のストーリーだと思います。 この計画区域をこうした理由、史跡を切るわけですから。こういう理由でこうして、観覧のルートは主にこういうふうになるので、その部分については保存だとか、保全だとか、裏のバックヤードになるところは整備としてゾーニングします。という書き方をされればいいと思います。なんか自明のように計画区域の線がぼんってでてきて、それを色分けしているだけなので。議論がなんていうのかな。公開活用の計画を立てるうえで周辺をどうコントロールしていくのかということの、どのエリアを設定しますかということが決まれば、そこがきちんと書いてあれば、この 107 ページの図の説明ができるわけです。 今の状態だと、図 3 - 6 がでてくるバックグランドというか。そもそもエリアをどういうふうに設定しているのか。今回こうだから、こう設定します、と。重要文化財を公開活用していくうえでのまずといったら、こういうゾーンになって。それには現状はこういう施設があって、公開のうえでバックヤードになるような、あるいは共益、歴史的施設があるなど。そういうのを見ながらゾーン分けの色分けがされていくというのが、環境保全計画の基本です。書き方の順番が。いきなり木がくるのもそうですけど。文化財の公開活用のうえでの、まわりのゾーニングをどうしていきますか、という書きぶりにしないと何の計画かわからないです。先ほどから順番がというのは、そういうふうに記述の順番さえ頭にイメージできれば、この順番にはならないと思います。まず、それぞれのどこに重要文化財があるので、そこまでにはこういうルートがあってとか。トイレはどこにあって、現状はこうであるということで、今後保全、保存整備でこうゾーニングします、という。建造物の保存活用計画とするならば、そういう書き

	方にされるといいです。 　史跡は史跡で価値を有するものと、それに貢献するものと、便益施設などいくつか分けて、それをどういうふうにコントロールしていきますかということです。それとはまた少し違う視点なので。そういうような流れで書かれればいいと思います。 　ここまでいろいろな保全建物をたくさん挙げられて、これはいいですけど。建造物を公開活用していくうえで、107 ページの上のところに書いてありますけど。文化財建造物の健全性およびその観覧環境を保護するため、文化財建造物の周辺環境と観覧経路の周囲を適切に保全する。そのためには、どういうゾーニングをして、そこにあるものはどうコントロールしていきますか、という書きぶりに、多分してもらえればいいと思います。そのうえで樹木は現状どうだから、伐採するところが必要など、そういうような書き方があるのかもしれませんが。 　そういう方針があったうえで、第 2 節、第 3 節の区分をどうゾーニングするのかというのは、だから現状はこうでこうだから、ルートはここは保全できちんとやります。近代の園路は、整備された園路であっても、それは保全でいきます。というようにしますとかいう書きぶり、そういうストーリーだと思います。それを意識して、もう一度材料を整理されればいいかと思います。そういう書きぶりになっていないということです。いきなりエリアがでてくるから、なんでエリアはこういうふうになっているの、ってなってしまいます。そもそもどういう設計にしたのって。それは有料で入ったところがやはり、その人たちに対して文化財建造物を今後公開活用していくんだ、だからそのエリアをまず設定します。ということがきて、その中にはこういう設計図があるという書きぶりになってくると思います。そこを少し工夫されれば、とてもわかりやすくなると思います。そういう書きぶりになっていないので、混乱してしまっているということだと思います。
事務局	先生がいわれるとおり、史跡があってというところがあり、これはどうしようと、
溝口副座長	とても難しいです。名勝もあるし。名勝は名勝で保存活用があるだろうし、史跡は史跡で保存活用がありますので。それは、それぞれの価値基準が違っているので、それと合わせながらだと当然計画エリアは違ってきます。それでいいと思います。
事務局	いわれたように、活用までというところは今回、あるものを戻していくことを意識していましたので。活用については、次回等で検討していきますので、そこから立ち戻って、ご指摘された今回の区分や計画区域の考え方など、そのあたりが、ストーリーをきちんとご説明できるように検討します。
小濱座長	区域分け、区分分けの説明を、はっきりしてもらいたいということですね。
溝口副座長	まずは、エリア設定がとても大事だと思います。ほかの事例だと、だいたい、さっきもお話しましたけど、屋敷を超えて隣の敷地まで入れて計画区域に設定する場合も、それは国登録ですけれども、国庫補助でやってい

	る。そういう事例も実際にあります。 本体をやるためには、トイレも必要で、駐車場も必要です。便益施設をどうしますか、といのがあります。隣の敷地まで含めたものを、計画区域に入れますという場合も、当然あります。トイレがないけど、文化財の中に作れないとすると、当然ここもそうですけど、ほかのところにトイレを整備しないといけないです。それが敷地の中に作れない場合も当然あります。そうすると、隣の敷地や、ちょっと離れたところに公園があるけど、そこを使うということであれば、そこも入るのか。というエリアをどう設定しますか、ということになってきます。その説明は、十分つけやすいと思います。有料公開の話ですから。今囲われているところは、もちろんそうなんですけど。その対象の人に、どういうふうに公開していくのかというところで、ゾーンが決まってくると思います。そういう記述の整理の仕方、順番はそういうふうに書かれると、とてもわかりやすいです。
小濱座長	区域分けの考え方、建造物は建造物の区分分けの考え方で、その説明をはっきりしてもらいたいです。 ほかに、ありますか。よろしいですか。それでは、今日出たご意見について、また考えてください。重要文化財については、これで終わらせていただき、次の議題、(2) 表二の門の雁木復元検討について、
溝口副座長	その前に、少しすいません。乃木倉庫、前回もいいましたが、124 ページ、125 ページで類例をだされています。これは前回もお話しましたけど。軍事施設、軍関係の施設というのは、それはそれで一つあります。もう一つは、煉瓦造の洋小屋を含んだ倉庫建築ということなんですけど。表 7 は全部それに該当しますか。
事務局	煉瓦以外のものが、不要ということですか。
溝口副座長	価値づけのところで、123 ページに書いてありますけど。煉瓦造倉庫における建築技術的発展や煉瓦造建築における耐震技術史が云々と書いてありますけど。それからもう一つは洋小屋ですよね。和小屋ではなくて。それは倉庫建築としては確かに近代性を表すので、価値付けの部分で非常に重要な条件だと思います。その 2 つの条件、ほかにも入れてもいいですけど。その 2 つであったときに、この 25 個の事例は全部それに該当しますか。
事務局	それとは別で、現存している明治前半期、
溝口副座長	明治前半期の土蔵、近世などもっと前から土蔵建築はいくらでもあるわけです。前回もお話しましたけど、私が調査した秋田のものなど、近代倉庫調査で調査したものがいくつかあります。紡績のは、確か和小屋だった気がします。土蔵だった気がします。そういう視点で類例を整理されるべきで、普通の土蔵造りで明治前半期といったら、べらぼうに日本全国にまだ残っているので。その前に書いてある価値づけに照らしてという話だと、前の文章に書かれているのは煉瓦造です。書かれていないですけど、洋小屋というのは一つ重要な近代を表すポイントだとすると、その 2 つの視点で技術的、学術的な価値があるという話です。それを満たす事例の中

	で、どうかという議論ならいいです。明治前半期の土蔵、倉庫を全部挙げましたとなると、ほかにもいくらでもあるでしょう、という議論になってしまうので。その物差しではないでしょう、ということを前回お話したんです。 そういう面で、表7については精査してください。それが価値づけに関わってきます。そうするとかなり抜けると思います。それはマストです。普通の土蔵を入れる必要がないです。乃木倉庫を評価するうえで。そういうことは、前回もお話しましたが、あまり改善されていないので、それはぜひお願いします。122 ページ、123 ページにダイレクトに関係する、この事例でしょう、だからこんなに価値があります、という。ほかの物差しの事例が入ってしまうと、よくわからないので。それは整理してください。前回もお話しましたけど。ということです。以上です。
事務局	この整理は、時代的に切った整理です。
溝口副座長	だから前回も、時代ではなくて、たまたま私が秋田の近代遺産の調査に入っているものだから、見ているものもあるじゃないですか。このリストが何なのかっていったときに、乃木倉庫の前に書かれている煉瓦造で、洋小屋を使ってというのは、まさに近代のというと、その2つの条件を満たす倉庫建築が、主だったところでこうと挙げた中で、というのはいいです。多分そうではないものもありますよね。
事務局	時代的な視点も必要ですよね。
溝口副座長	明治前半の倉庫をなぜ特質して、土蔵を取り上げるかという議論に今度なってくると思います。
事務局	土蔵というよりも、倉庫建築の中の、一つの土蔵建築として取り上げた。
溝口副座長	そこまで広げなくても、もと際立った特徴があるときに、もっと大きな輪郭線がぼんやりするところで拾うよりは、これとこれ2つ条件を揃えているものがありますか。とっても少ないでしょう。だから、こんなに重要ではないですか、という。前の櫓のところは、そういう書きぶりがされていますけども。同じだと思います。そうすると、明治前半期の倉庫建築というよりも、それはたくさんあると思います。やはり近代性をあらわす煉瓦造であり、洋小屋の倉庫というのは、これくらいで多くはない、という説明のほうが、122 ページ、123 ページで説明されていることに整合してきます。もっとタイトな条件設定が可能であれば、そういう類例を挙げられたほうが、より乃木倉庫の特徴が際立つと思います。
事務局	乃木倉庫を際立たせるために、どういう事例があるのかということですか。
溝口副座長	そうです。価値づけのうえでね。
事務局	今の類例は時代で切っていますが、

溝口副座長	もっとタイトにできるのではないかと思います。そのほうが、乃木倉庫の評価にふさわしいです。
事務局	わかりました。中身を整理してみます。
溝口副座長	それだけです。それを整理しないと、ぼやけてしまいますので。
事務局	いわれるとおり、整理します。
溝口副座長	たくさん挙げなくていいと思います。少なければ、それだけ貴重ですから。
小濱座長	土蔵というのは、あまり類例としては。
事務局	文章にあうように整理します。
溝口副座長	類例をね。前のところでそういうふうに書かれていますから。
小濱座長	表を整理し直すということですね。 それでは、次の表二の門の雁木復元検討について説明をお願いします。
	(2) 表二の門雁木復元検討について
事務局	資料2をご覧ください。表二の門の雁木復元検討で、表二の門の雁木については、令和元年度から各種調査を行っています。昨年度の発掘調査で、雁木の遺構が残っていることを確認し、それを基に整備を進めていきたいと考えています。今回、これまで5年間行ってきた調査成果を基に、今後の整備検討のベースとなる雁木の姿を復元した図面を作成しました。それについて、ご意見をいただきたいと思います。それでは図面の前に、調査の成果を簡単にご説明します。 まず、発掘調査です。昨年度の発掘調査で、主に4つの項目で雁木の痕跡を確認しています。最も直接的な痕跡として、土塁の裾部で切石が出土し、雁木の最下段と考えています。痕跡から当時の地表面を考えると、出土した切石は当時、上部の一部しか露出していなかったと考えられます。イメージとしては、0段目に近いものと思われます。投影資料をご覧ください。投影資料3は、出土した切石の入隅部になります。入隅部だけ少し形態が違い、奥行きがそこだけ短かったり、小さな矢穴がでています。雁木の最下段ではありますが、築城時のものではなくて、どこかで積み直しされたものと考えています。 次に背面構造の痕跡を確認しています。資料の、こちらの写真がそうです。土塁の斜面一面で円礫を確認しています。これが雁木の背面構造と考えています。こちらが約45度の勾配をもっており、これが雁木の勾配に関連する、反映されている可能性があると考えています。平面図で、投影資料で見づらいかもしれませんが、斜面の中で緑色の点線で囲んだ部分に関して、垂直面になっている平坦面が検出面として確認されています。こちらは設置時の痕跡が残っていると考えています。 次の要素としては、土塁に接する石垣面のところに階段状の加工痕を確

	認しています。矢印の先端が、階段状の出隅の部分です。そういったものが、雁木の痕跡と考えられますが、出土した切石と比較すると推定ラインが一致しません。この加工痕に関しては、築城時の雁木に伴う痕跡ではないかと考えています。 控柱の下端を発掘調査で確認しています。下端が今、投影資料でお示ししているような状態です。控柱の一番下の部分には、鉄製のボルトが刺さっていました。こういったことから、もともと掘立柱であった可能性があります。後世に修理をされていますが、その中でも、掘立柱の穴が、今ある控柱の下でしか確認できていません。控柱の位置は、基本的に変わっていないものと想定しています。 そのほかの遺構としては、金城温古録を見ると雁木の上の部分に、平坦面が描かれています。こういった土塀、背面の平坦面というのは、発掘調査では確認できていません。土塀の天端近くまでずっと斜面が続いているような状況です。これが発掘調査で確認された、雁木の痕跡になります。 次に、史料調査です。まず古写真の検討を行っています。名古屋城は多くの古写真が残されており、すべてを確認しましたが、雁木が直接写り込んでいるものは確認できませんでした。ただ、表二の門の正面側の写真は、いくつかあります。これらを比較すると、一番古く残っているのが濃尾地震被災直後、明治 24 年頃に撮影された写真です。こちらと現況、ないしは戦前に撮影されたものを見ると、狭間の位置が異なっています。そういったことから、濃尾地震被災直後から戦前のガラス乾板が撮られる間に、土塀の修理が行われています。これは記録にない修理だと思われますが、そういったことが古写真から明らかになりました。濃尾地震被災直後の写真から現況の状況を見比べると、石垣の状態で動きが特に見られなかったので、少なくとも明治 24 年以降は石垣の修理は行われていないと考えています。 そこで指摘できることは、石垣の一番上の天端石が、正面の天端石と背面の土塁の天端石が同一、石垣の天端石でもあり、土塁の天端石でもあるという石材がいくつかあります。それが動いていないとなると、現況の土塁の高さというのが、少なくとも明治 24 年以降高さが変わっていないということが、いえるかと考えています。 次に絵図です。こちらも多くの史料が残されており、それで変遷を追うことができます。投影資料に、主な絵図を載せています。これらを 1 個 1 個見ると、雁木の段数が、かなりばらばらに描かれています。見やすいものだと、これは 3 段で描かれていたり、5 段で描かれていたり、そういった状況になっています。この雁木の一番下の収まりが、両側の石垣にどういうふうに収まっているのかという描き方も、かなりばらつきがあります。そういったところから雁木の形状を正確に描かれた絵図は、どれもないのではないかと考えています。雁木の復元根拠となる絵図は確認できていませんが、この変遷を見ると、築城時の絵図からずっと雁木が描かれているものが、大正 4 年から大正 8 年の間に雁木の状態から土塁の状態に描写が変わっています。大正 8 年以降は、ずっと土塁として描かれていることから、これも記録には残されていませんが、大正 4 年から大正 8 年の間に、雁木が撤去されている可能性を考えています。 文献の調査でも、江戸時代の史料をさまざま確認したんですが、表二の門の雁木に関する記載は、直接的な記載は確認できていません。投影資料でお示ししている金城温古録もありますが、こちらも雁木の描写が現実と合わないので、正確性が少し疑われるかと思います。

	文言としての記載の中では、門に伴う雁木ではないですが、土塁の多門櫓に上る雁木を計測しています。記載としては、雁木踏石の幅1尺、高さ9寸ほどという記述があることから、そこのおおよその参考値を、金城温古録から出しています。 資料2ページ目をご覧ください。それ以外に類例調査を行っています。近世城郭で雁木とすると、あらゆる石積みの階段すべて雁木と称しています。その中で、より表二の門の雁木に近いものを抽出するために、まずは分類をしています。雁木の中には、表二の門のように、土塀の背面に駆け上がるような雁木のほかに、船着場のように水面に下りる雁木であったり、山城の造られたお城だと、城内の通路として上がっていく中で雁木があったりします。そういったものを、機能に分けて5種類に分類しています。表二の門はⅠ類に値します。Ⅰ類に値する中でも、特に表二の門の雁木だと、平面形状としてL字の形状を持っているので、それをさらに見つけるために、3つの平面形状に伴う分類を行っています。表二の門はⅠ類の1として取り上げています。 他城の事例の前に、城内の事例を確認すると、城内で参考になる雁木は主に3つあります。1つは東北隅櫓の石段で、土塁の上に上がる雁木で、現存と考えています。あとは、二之丸大手二之門のところにも、現存と思われる雁木があります。二之丸東二之門については、平成の頃に積み直しを行っていますが、雁木の石材自体は再利用しています。この3つが参考になるものとして、こちらの石材を1石ずつ計測しています。そこから見られた平均値は、蹴上が29.6ｃｍ、踏面が27.3ｃｍ。こちらが復元に関連する根拠の一つの数字かと考えています。 その一方で出土した切石の計測値も、表1に載せています。こちらの平均値が、城内の平均値よりもやや誤差があります。高さ＝蹴上が 32.5ｃｍと、奥行きが25.2ｃｍとなっています。 ほかの参考事例として、投影資料の10で他城事例として整理しています。全国各地の近世城郭を、ひととおり調査をしました。雁木、高麗門の土塀に上がる雁木としては87事例を確認して、計測を行っています。この中で表に門と同じL字状を持つ雁木に関しては、21事例を確認しています。こちらの計測値の平均値は、蹴上27.1ｃｍ、踏面28.8ｃｍです。数値としては、城内の事例とやや誤差を確認しています。 これまで数年間かけて、さまざまな調査を行ってきましたが、どれも復元を考えるにあたって、部分的な要素がさまざま見えてきているというのが、概況です。この中でどの要素を重視して、それが当初の姿ではないかと検討するのか、こちらで図面を作成しているというのが、3ページ以降になります。図面は主に2種類の図面を作成しています。A案、B案としていますが、前提条件は、出土した切石を基に踏面を120mmとしています。先ほどご説明した入隅部で、一部奥行きが短い切石を確認しているので、そこが踏面にふさわしいと考え、120mmで固定しています。城内の事例を見ると、段が切石の天端の上に積んでいる状況が見られたので、そのように断面図を作っています。雁木の最上段の部分は、古写真の調査で当初から動いていない石材をいくつか確認しています。それをもとに、そこにできるだけ収まるように計画しています。 土塁の天端は、資料3ページ目の平面図を見るとわかるとおり、L字状に屈曲する部分が、現況は土塀が直角よりもかなり鋭角な形状になっています。少し違和感がありますが、古写真を見ると明治24年以降は、この平面形状であったことは間違いないということで、これを維持するかたち

	で設計しています。 入隅部の積み重ね方法も、類例調査によって算木積みのように、入隅部を積んでいるので、そのように設計しています。城内の事例で、ビデオスコープ等で上下の重なりを確認しています。それを基に 30mmの重ねを設定しています。 各案について、簡単にご説明します。A 案に関しては、蹴上 320mm、踏面 273mmとしています。それは、出土した切石の蹴上 320mmと、出土した切石から踏面がわからないので、城内事例の平均値の 273mmをもってきたものになっています。寸法を重視して設計したものになっていますが、実際にできあがった図面としては、違和感が残るものとなっています。 3 ページ目の平面形態を見ていただくと、1 段目から上がっていったときの最上段の部分です。8 段目の部分が、ほかの段に比べて踏面がかなり幅広になっています。この寸法でいくと、8 段目のみ踏面が広くなる状況です。平面形で 8 段目だけ広くなってしまうので、さらに 9 段面を乗せた場合に断面図がどうなるのかというのが、資料の 5 ページに載せています。現状の土塁の天端石の上に雁木がくる状況になります。出土した雁木の寸法をもとに設計すると、平面、立面ともにやや違和感があるような図面になってしまうことが、現状の課題としてでてきています。 その対案として設計したのが、B 案です。発掘調査の中で背面構造が、約 45 度の勾配になっているというのを基準にし、蹴上、踏面ともに 300 mm、勾配 45 度の設計をしています。こちらの設計とすると、先ほどの A 案にでてきたような立面、平面の収まりの違和感が解消されます。現況にある土塁の天端石に据え付くようなかたちを確認しています。こちらの復元図面も、やや課題は残っています。控柱の据わる雁木の段が異なってしまうのが、課題として見えてきます。 投影資料でお示ししているところでいうと、こちらが一番西側の土塁の、北側の控柱です。これが 2 段にまたがって据わってしまっています。その下のほうの段に、2 段にわたって上下に分かれて控柱が据わるようなかたちになっています。ここが、やや違和感があるかなというところですが、発掘調査の成果を第一にすると、控柱の位置はおそらく変わっていないと思われるので、こういう状況になってしまうのかと思います。ただ類例調査をもとに、こういった事例がないか調べると、あるにはあります。資料の一番最後に載せています。江戸城の田安門は、控柱が据わる段が異なっている状況が見られます。大阪城の玉造門は、2 段にわたって控柱が据わり、それに合わせて雁木を組み込んでいます。そういう事例も確認しています。これはあくまで一部の事例なので、基本的には同じ段の上に控柱が据わっているというのがあるのかと考えています。他城の事例であるものを採用し、B 案のような復元図を作成するのかどうかというところで、ご意見をさまざまいただけたらと思います。 今回、A 案、B 案 2 つの案をお示ししましたが、調査成果をもとに純粋に雁木の姿がどうであったのかを検討した図面になっています。今回いただいたご意見をもとに修正し、それ以降に復元図面の案に近づけるように、具体的な整備の方針を検討していきたいと考えています。
小濱座長	今のご説明に対して、ご意見ありましたら、よろしくお願いします。
麓構成員	こういうものを復元するときに、優先的に、これは動かしようのない事

	実、この点については正確にはわからないので、いろいろな点を考えながら決めていく、というのがあります。それが、きちんと分けられていないです。類例をたくさん調べて、類例がこうです、ああですというよりも、まず名古屋城で動かしがたい、今判明しているのは、こういう点だというのがあって、それは変えることができないわけです。それをもとに、いろいろ考察していくというふうにしないといけないです。 　では何が動かすことのできない、確たる事実なのか。それは、どう考えていますか。
事務局	一番いろんなことを踏まえて、確実といえるのが、雁木の範囲です。どこから始まって、どこに収まるのか、そこは変わりようのない事実だと思います。
麓構成員	それは石垣からですか。
事務局	そうですね。
麓構成員	石垣際の雁木の取り付きがここだ、ということですね。
事務局	そうです。
麓構成員	石垣が動いていないから。積み直したとしても石垣は、基本的には動いていないからということですね。
事務局	はい。あとは、出土した切石があるところで、範囲が決まってきます。あとは控柱の位置です。
麓構成員	そうですね。これもほかの位置からは確認できていないから、同じ位置でずっと変わったんだろうということで、変わっていないですね。
事務局	あとは背面構造です。円礫面を検出している面が、それより下に掘り込んで雁木が設置されていないです。範囲と雁木が設置されている面の下端と、控柱の位置が確実で、動かない要素かと思います。
麓構成員	その前にもう一つ、堀側の石垣です。積み直しがあるにしても、高さと位置は変わっていないわけでしょう。だから堀側の石垣も変わっていないです。そこに、土塀が立ったわけです。石垣際に土塀が立ったわけです。表二の門も当初のものが遺っているので、変わっていない。土塀と表二の門の取り付きから考えると、高さ関係になりますけど、土塀の高さも変わっていない。 　そう考えていくと、まず堀側の前面は確実で、その後ろの雁木の段で、A 案、B 案で赤い線、青い線で書いたのは、同じ幅でずっと積んで、最下段と平行で積み上げていくと、こうなるという線でしかないですけど。その線と石垣の線は平行ではないですよね。
事務局	そうですね。

麓構成員	石垣の線とは平行ではなくて、控柱の位置は石垣の線と平行です。3ページ、7ページの、石垣の前面と控柱の、ここに立つ石と、その位置を全部見ていくと、全部同じ位置に控柱として。つまり、土塀のほうも木の柱が立っていて、控柱があって、貫で繋いでいるわけで、その間隔は変わっていないです。 そうすると、この線と雁木の一番下から平行に積み上げてきたところと食い違った場合には、同じ段に控柱がくるという発想はなくなるわけです。 さっきの江戸城ですか、段の違うところに立っていますというのは、そうならざるを得ないです。そうやって決めていくと。それがおかしい、おかしくないというよりも、石垣の前面に土塀がたって、そこから等間隔で控柱がきて。一番最初は、控柱を先に据えて、雁木を据え付けていく。雁木は石垣とは平行ではないので、下から積み上げていったときに、踏面が一緒だとしたら合わなくなってきます。そうすると、段数の違うところに立ってもやむを得ないです。それが、いいんだろうか、いけないんだろうか、ということを考える必要もないと思います。そういう納まりしか考えられないんですから。 というように、確実なものから建築物を想定して、施工の順番も考えながら、こう納まったであろうという結論をださないといけないと思います。 もう一つ、お願いしたいのが、A案にしてもB案にしても、5ページの雁木の断面と背面の立面図は書かれているけど、雁木の断面の上に、土塀と控柱がどこに立つかという図面がないです。断面図が書かれていないです。断面を切る位置によって違うというのもわかりますけど。例えば、控柱の一番近いところで切ったときに、こういう納まりです、というような、断面図に控柱と土塀も書き込んでほしいです。そうすると、よりわかりやすいです。 それで復元できたものが、結果的に類例として見たものと比べて、あるお城の雁木と土塀控柱と似ている、全然違うということが結果的にわかってくる。少なくとも確実に復元の根拠になるものを抑えていったうえで、復元案を作らないといけないと思います。 石垣際である程度わかるんですよね。内側の石垣際と雁木との納まりが。前に発掘調査をするときから常にいっていましたけど。雁木そのものの下部の断面構造がどうなっているのかということも大事だけど、一番よくわかるのは、石垣際の取り付き部分。石垣と雁木の取り付き部分。そこを調査することが大事ですよ、と。それは明らかになってきていますよね。明らかになって、調査をしたんですから。
事務局	そうですね。
麓構成員	それでわかるところと、もちろん、わからないところはありますけど。明らかになっているところを動かすわけにはいかないと思います。
溝口副座長	それをやるときれいに収まらない感じがしますね。49.5 度になってしまっているから。
事務局	そうですね。説明の中で省いてしまったところを補足します。資料3ページの平面図ですと、土塁の天端の中に、天端石で緑色に囲われているも

	のと、囲われていないものがあります。囲われていないものが、石垣の天端石を兼ねていて、高さが変わっていないものです。緑色の枠のあるものは、石垣の影響を受けない独立した石材で、現況でもかなり拝んでいたり、傾いています。そういったものはある程度据え直しができるのかと考えています。そこは動かすことのできるものと考えています。そうすると、それを動かすことで
溝口副座長	原位置を保っていない可能性があるということですね。
事務局	そうです。それをやると、収まりがよくなります。
溝口副座長	3ページでいうところの、緑ではないもので収めると、収まらないということですか。収まるということですか。緑のものは動いて、ずれ落ちていたりするから、位置が変わっている可能性があるけど、そうではないもので、かつ麓先生がいわれていた、当たりの残っていた、それは動かない事実ですよね。先ほど麓先生のご説明で。それでやると、どういう雁木の設定になり得るかということだと思いますけど。その案ではない。
事務局	平面的にいうとそうなんですけど。立面的に見ると、土塁の天端の、おそらく側面に最上段が据え付くと思いますけど。側面の中のレベルが、調査の中でははっきり確認できていないです。天端石の側面分は、どこに据え付くか範囲が得られるので、そこで寸法がさまざま考えられてしまうという状況です。
麓構成員	ちょっとわからなかったです。天端石の側面分ってなんですか。
事務局	最上段が、天端石の下端に据え付く可能性もありますし、真ん中に、
溝口副座長	天端石があって、それにあとから据え付けるから、側面に、この高さがどう設定するか、ということでしょう。
事務局	そうです。
麓構成員	そもそも正面側の、天端石の控えというか、裏側と雁木との関係というのは、雁木は平面的に矩形になっているから、石垣の表側と雁木は平行ではないのだから。そこに雁木の天端と、石垣の控えの一番尻の部分と合っているとは限らないわけでしょう。
事務局	そうです。
麓構成員	そこに隙間がある場合もあるわけでしょう。
事務局	どこかで、そのずれを解消しているのかなと
麓構成員	どこかというのは、石段とは違うかもしれないですよね。
事務局	そうです。

麓構成員	その狭い部分は、タタキのようになっている可能性もあるわけです。
溝口副座長	天端のフラット面が、平行にきているのかわからないですよね。平行にきているんですか。きているのかは、わからない。
麓構成員	少なくとも最上段の雁木石のラインと、石垣の天端のラインとは平行ではないわけですよね。
事務局	そうですね。
麓構成員	だったら、その平行ではないものをタタキにするなど、何らかの方法で解決しているはずですよね。当初は。
溝口副座長	平行でないとすると、土塀からの控柱も同じ距離ででているとすると、当然段は違ってきますよね、
麓構成員	そういうことになります。ならざるを得ないです。
溝口副座長	ならざるを得ないから。逆にいうと、それを揃えるためには、腕木の長さを調整しないといけない。
麓構成員	というより、発掘してでてきていないので。腕木の長さはちょうど今、長さは合うから。腕木というか、石垣の外側のラインと、控柱の立っていた位置と、距離的には全部等間隔になっているのだから、ずっと土塀と控柱は平行にきているはずです。石垣の前面側の。それは動かすことができないから、雁木のほうを段の途中で切らざるを得なくなくなります。
溝口副座長	段は違ってくるということですね。それだけの話ですね。
事務局	こちらの石垣の鋭角な部分と、雁木の直角の部分の収まりは
麓構成員	雁木の直角の部分ってなんですか。ああ、雁木のほうね。ただ、雁木も直角とは限らないです。雁木が、どうして直角っていえるんですか。一番下が残っているのが直角ですか。
事務局	一番下もそうですし、城内の事例でも、
麓構成員	だから、城内の事例というのは、あとまわしにしてください。わかっている事実をもとに、まずは考えてください。
事務局	事実をもとにいうと、最下段の
麓構成員	最下段のものからいうと、踏面は一緒だろうから、という話ですよね。
事務局	はい。

麓構成員	それは、それでいいと思います。
事務局	そこのずれを解消するために、ここの一番隅の天端石は動いている可能性があります。これを１石分、こっちに移動させて、天端の範囲を広げて据え付けるという設計にしています。
麓構成員	そういうことですよね。
事務局	そうではなくて、ここは無理にあえて動かさなくてもいいという。
麓構成員	いやいや、その緑は動いているのでしょう。
事務局	そうです。
麓構成員	緑は動いているのだから、内側の雁木のほうに動かしてもいいと思います。
溝口副座長	外して土塁になった時点で、位置を保っているのかどうか、全部が、あやしいですよね。
事務局	そうですね。
溝口副座長	落ちてきたのを、削って置いた可能性もありますから。
事務局	雁木を撤去する際に、天端石もある程度動いている可能性があります。
溝口副座長	その直角のところがあって、そこから上がってきたところで、上がフラットになるように、緑の位置が、その位置にあった。だけど今はずれている、という解釈をせざるを得ない。
小濱座長	雁木も本当は直角なんですかね。石垣が直角ではないんでしょう。
事務局	城内や他城郭の
麓構成員	それは後にしてくれますか。あくまでも、最下段の石が、それだって、今の図を見ても直角ではないですよ。それを見ても直角ではないじゃないですか。それを直角とは思えないです。
小濱座長	そうすると天端で調整しているということですか。ずれを。
事務局	今の設計では、そういうふうに考えています。
麓構成員	今の設計というよりも、復元はこうやって理詰めで考えていくしかないですから。根拠の優先順位を明確にして。 最下段の石が発掘して、ここで動いていないというのは、それは動かしようがないわけです。あとは、踏面が同じで、そのまま平行にしていると考えるなら、それはそれでいいです。でもそうすると、天端のところでは、

	前面の石垣とは平行ではないので、すべて石材ではなくて、幅の狭いタタキ状のものがあるかもしれないですけども。
溝口副座長	平行でなくても、当然そうなってしまっているから。不自然な気はしないですよね。
麓構成員	不自然な気はしないです。
溝口副座長	取り付けていく、工程の順番からすると。
事務局	復元の考えとして、天端石ですけど、動いているのではないかというものを、緑の色を付けていますけど、先ほど麓先生がいわれたように、タタキの可能性があるとすると、そこは今石は堀側に動いているものを前にだす。前にでていたのではないかと、今考えを整理しています。そこが、本当にそういい切れるのかなというのはちょっと、最上段がタタキという案が今まで、
麓構成員	最上段がタタキではなくて、天端石と雁木の最上段との間です。
事務局	すいません、表現が正しくなかったです。その間がタタキという考えがあるのであれば、天端石が堀側にすべて動いていたのではないか、というのはちょっと議論の余地があるのではないかと思います。
麓構成員	天端石が堀側にというのは、どういうことですか。
溝口副座長	石垣部会か何かで、そういう話になっているんですか。
事務局	いえ、なっていないですけど。この緑色の、現状がグレーなんですけども。グレーのところにあって。天端石がすり付いていたかもしれないという考えで、緑色に、天端石がもっと前ではないか、というのが復元案になっていますけども。
麓構成員	それは、そういうふうに動いていると思っただけですか。
事務局	そうです。
溝口副座長	緑色が据え直しの位置。
麓構成員	動いていない可能性があるわけですか、そしたら。
事務局	現状がグレーなので、根拠として動いたというものは、発掘では発見されていないです。
麓構成員	だったら、動かさないほうがいいのではないですか。
事務局	さっき麓先生がいわれたとおり、雁木と現状の石が、タタキ、土かもしれないですけど、そういう可能性はやはり高い。これだけすべてが動いて

	いるというよりは、動いていないと考えたほうが自然かなと、今思いました。
麓構成員	それともう一つは、下は動いていない。上も動いていると限らないのであれば、踏面を全部平行でもっていかないで、踏面も徐々に各段で、平行ではなくて、上の動いていないかもしれない石のところへ合わせていくようなことも考えられますよね。それは、堀側の天端石の角度と、雁木の最下段との角度が大きく違うのだから。雁木を必ずしもすべて平行に積んでいたとは限らなくて、外側の石垣になるべく合うように、ちょっとずつ修正していったという可能性もありますよね。
事務局	可能性はもちろんあります。
麓構成員	それがわからないときには、簡単に現状ある天端石を動かさないほうがいいと思います。
事務局	現場を確認した中で、明らかにほかよりもでているようなものがあれば、そういう考えで整理できると思いますけど。
麓構成員	それは動いていると思っていいんですけど。
事務局	明らかでないものについては、例えば7ページの東側の、2石ともぐっと前にだすことを今計画していますけども。そんなに、2石とも並んで動くのかなと、今お話を聞いていて思いました。雁木と天端石の間に何かあったのだろうと整理したほうが、自然なのかなと思いました。
溝口副座長	自然というか。なんか本末転倒していて。史跡として現状残っているものがあったときに、それが明らかにずれている証拠が明らかであれば、元の位置に戻してあげればいいけど。そうでないものがあって、この絵でいくと、今は青色の雁木が平行でこうなっているから、それに今ある史跡の遺構を改変して合わせるという行為じゃないですか。それは全く史跡の観点からいくと、本末転倒していませんか。それは合うように据え付けて、青色の新しいものをそうなりましたということで、それが違っていたら、青いところはあとで直せばいいわけだけど。史跡の現状のものを、青い新しいものに合う、復元の想定のもとでやるのに、合わせて改変するというのは、やってはいけないことです。史跡として。それは、今あるもので明らかに落ちているとかいう、今回の北側の積み直しているところみたいなのは別ですけど。そうではないものを青色に合わせて、全部石を据え直しましたというのは、動いている証拠もないのに、それはやってはいけない。そうではなくて雁木をどう復元できるのか、という発想にならないといけないと思います。
麓構成員	ちょうど、今でているものを見ると、天端石据え直しと緑で書いてあるものの動かす前の原位置が、外側の石垣とほぼ平行ではないですか。これは、そのとおり変わっていないんですよ。それを雁木に合わせて動かすという考え方が、そもそも間違っています。

事務局	そうだと思います。
溝口副座長	それで、嵌めるとしたら、どういうような雁木になりますというのは、先ほど類例で平行だっていっていましたが、平行ではないかもしれない。場合によっては、こっち側とこっち側で角度が違うかもしれないです。据え付け方が、ちょっとずつ、
小濵座長	少しずつずらしていったかもしれない。
溝口副座長	石工が。その可能性だってありますよね。石材は同じものをもってくるんですけどもね。まずはその前提で、どう積むとこうなりますという、現状の遺構のところでやると、こういう形になりますというのを示されるのが、まずスタートかなという気がします。
小濵座長	A 案、B 案 2 つありますけど、A 案のほうが現実の発掘の成果を忠実に守った案ということですか。
事務局	出土した切石の寸法を採用したものが A 案です。
溝口副座長	勾配が、それだと上があいてしまうということですね。急だから。天端の犬走みたいなところがでてきてしまうということですね。
小濵座長	当然、雁木の最上段と天端石との蹴上げも変わってくる、違ってくるということですね。
事務局	そうですね。
小濵座長	49.5 度でずっと上がってくるので。A 案が発掘の事実に近いということですか。麓先生がいわれた、どれだけ発掘の事実にあっているのかどうかというのは、A 案のほうが近いということですか。B 案は収まりよくするために、45 度にした図ですか。
事務局	どちらのほうが、というのはあまりないです。雁木の寸法自体は、ご説明した中で、3ｃｍから５ｃｍくらい幅があります。B 案のほうも、蹴上、踏面 300ｍｍというのは、事例の中で収まる数値になっています。
麓構成員	とにかく A 案も B 案もだめなんですけど。今日のものは。まずは、動かせないものを、例えばしっかりした黒い線で書いて、そこにどのように動かせないものに、不自然なく納まるような雁木になるかという案を、色を変えて書いたらいいと思います。 蹴上の高さは、ばらばらだと困りますけど、踏面は必ずしも全部、端から端まで同じ踏面でなくてもいいと思います。これだけ天端と雁木の最下段とで触れていると、その間で少し解消するような雁木の据え方をしていると思います。
事務局	石材が 1 個ずつ、かなり実際は違うだろうということで、大きく平均をとったりして積んでいますが。蹴上に対しては、そこは一定にしたほうが

	いいと思いますが。
麓構成員	それは変わらないです。それが変わってしまったら、段差ができてしまうから、それはないと思います。段差って、同じ段でですよ。各段で微妙に違うというのはあり得ます。
事務局	あり得ますか、やはり。
麓構成員	1段ずつが、右と左で高さが違ったら、そこで段差ができてしまいますよね。そういうことはないという意味合いです。
小濵座長	6ページや7ページの断面図には、控柱の位置が書いてないですね。書いてあるのですか。
麓構成員	書いていないので、それも合わせて書いてほしいということを、先ほどお話しました。
小濵座長	6ページの断面図で、雁木の最上段と天端石の間の、天端石の蹴上というのは、雁木の蹴上と同じである必要はなくて、そこだけ変わっていてもいいということですか。変わっているのが普通ですか。
麓構成員	変わってもいいと思います。
小濵座長	変わってもいいんですね。そうすると、あながちA案がまずいというわけでもないですか。
麓構成員	6ページの図には控柱の位置が、根元が書いてありますけど、柱の足下が。こういう表現ではなくて、5ページの図に、まるまる土塀の断面として控柱がどこかというのを、書いたほうがわかりやすいというお話はしました。外側の石垣までです。
事務局	今回、A案、B案とお示ししていますが、どちらかを選んでもらうという意図はまったくありません。ベースとしておだしして、さまざまなご意見をいただければと思っていました。かなりクリアなご意見をいただいたので、今後それを参考に考えていきたいと思います。
麓構成員	今後、ここだけの話ではなくて、全体整備検討会議などいろいろ諮っていくと思いますけど。資料の検討の作り方として、確実なもの、重要なものから抑えていって、まっ先に類例みたいなものがでてこないほうがいいと思います。類例をこれだけ調べたというのが。
小濵座長	では、引き続き報告書の作成を進めてください。以上で、よろしいですか。
野々垣構成員	一ついいですか。5ページ目の図を見ると、ここも水平ではないと考えられているのですか。

事務局	そうですね。おそらく明治 24 年以降は変わっていないかと思います。土塀自体もかなり斜めになっています。
野々垣構成員	土塀も、もともとは水平だったと考えているんですか。
麓構成員	外側の石垣の天端はどうですか。
事務局	斜めになっています。
麓構成員	この勾配ですか。
事務局	はい。
麓構成員	だったら、こうなんでしょう。
小濵座長	天端に合わせているんですか。石垣に合わせているんですか。
麓構成員	今の話は、隅の算木積みが当然斜めになっていますけど、そこだけの話ではなくて。算木積みは当然斜めですよ。そこから先の土塀が、斜めになっているように見えないんですけど。写真からは。 算木積みのところが、勾配があるのは当たり前のことです。
小濵座長	軒は水平になっていますか。
麓構成員	軒は水平です。
小濵座長	軒は水平になっているんですね。
麓構成員	はい。まん中付近は当然、算木積みのところに比べてまん中付近は低くなるんですけど、普通。それは土台の下端を削ったりして、土台の天端を合わせるということもやります。あるいは長いときには、土台がちょっと折れることもあると思います。
事務局	これを見ると確かに、やや水平寄りなのかと思います。
麓構成員	隅の算木積みは、当然斜めですけど。
野々垣構成員	内側の、先ほどの動いていない石というのが、そもそも斜めになっていませんか。
事務局	天端石が下がっているのではないか、ということですね。もとの位置から。もとは水平で、なんらかの原因で下がったのではないかということですね。
野々垣構成員	わからないですけど。黄色い石が元の石ですよね。多分。違うんですか。
事務局	黄色は、今の位置です。

野々垣構成員	今の位置ですよね。現状ですよね。もともと下がっているように造られていた、ということはないですか。ほかの雁木というか、塀の犬走のところ、天端が下がっている例というのはないという話ですけど。さっき、平面的に動いていない位置は変えないという話をしていましたけど。垂直方向を勝手に水平にはできないので。ということも考えると、さっきの理屈だと、この斜めの位置をどう考えるのかということを検討しておかないと、設計が変わるのではないかと思いますけど。 西側でないか、反対側が水平なんですね。こっち側だけが下がっている。
事務局	表面の石垣ごとということですか。
小濵座長	土塁の高さも変わっているんですかね。
野々垣構成員	重みで下がったといえないわけでもないですけど。変化があるものとみなすのか、変化していないものとみなすのかによって違ってきますよね、多分。
溝口副座長	みなす、みなさない、というのは、さっきの緑色の線の話に戻るが。みなす、みなさないというよりは、まず現状があって。それに石を置いていくと、どういう問題がでてくるのかということが明らかになったうえで、次のステップで、ではどういう解決策があるのかな、と考えればいいと思います。今日は、同じ段で、同じ幅で上がっていく状態でやると合わないからA案、B案ってでてきたんですけど。まずは現状ででてきた石と、下の段から導かれる段とか、側面の痕跡、斜めのところも含めて、それを整合させるには斜めも考えられる、って一応考えてもらったうえで、不都合がでてくるところはどうするのか、次に考えるということだと思います。明らかになった事実から、まずやるとしたらこういうふうになる、というところから詰めてもらうのが最優先だと思います。
小濵座長	そういう方向で、もう一度検討してください。以上でよろしいですか。それでは最後に、オブザーバーで参加された文化庁の井川調査官、何かコメントがありましたら、よろしくお願いします。
井川オブザーバー	特にありません。本日は先生方、貴重なご意見をありがとうございました。引き続きよろしくお願いします。
小濵座長	ありがとうございました。以上をもちまして、本日の議事を終了します。進行を事務局へお返しします。
事務局	先生方、議論いただきありがとうございます。保存活用計画については、今後引き続き、こちらの部会でご議論いただき意見をいただきたいと思っています。雁木復元検討についても、今日いただいた、根拠をもって、当時の姿がどうであったかというところを部会へお示ししたいと思います。引き続きよろしくお願いします。 それでは以上をもちまして、本日の建造物部会を終了します。長時間にわたり、ありがとうございました。